

3

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ここまでのあらすじ」 七歳の保吉は父親と玩具屋を訪れ、店主から幻灯の映し方（ガラス板の画を光でスクリーンに映す機械の使い方）を聞いている。

「あのぼんやりしているのはレンズのピントを合わせさえすれば——この前にあるレンズですな。——すぐにごらんとおり、はつきりなります。」

主人はもう一度および腰になった。と同時にしゃぼんだまはみるみる一枚の風景画に変わった。もつとも日本の風景画ではない。水路の両側に家々のそびえた、どこか西洋の風景画である。時刻はもう日の暮れに近いころであろう。三日月は右手の家々の空にかすかに光を放っている。その三日月も、家々も、家々の窓の薔薇の花も、ひっそりとたたえた水の上へ鮮やかに影を落としている。人影はもちろん、見わたしたところかもめ一羽浮かんでいない。水はただ突き当たりの橋の下へまっすぐにひとすじつづいてる。

「イタリアのベニスの風景でございます。」

三十年後の保吉にヴェネチアの魅力を教えたのはタンヌチオの小説である。けれども当時の保吉は、この家々だの水路だのただたよりのない寂しさを感じた。彼の愛する風景は、大きい丹塗りの観音堂の前に無数の飛ぶ浅草である。あるいはまた高い時計台の下に鉄道馬車の通る銀座である。それらの風景に比べると、この家々だの水路だの、なんという寂しさに満ちているのである。鉄道馬車や鳩は見えなくてもよい。せめてはむこうの橋の上に一列の汽車でも通っていたら、——ちよūdōこう思ったとたん

イラスト

参考 〈幻灯〉

である。大きいリボンをした少女が一人、右手に並んだ窓の一つから突然小さい顔を出した。どの窓かははっきり覚えていない。しかしだいたい三日月の下の窓だったことだけはたしかである。少女は顔を出したと思うと、さらにその顔をこちらへむけた。それから——遠目にも愛くるしい顔に疑う余地のないほほえみを浮かべた！^①が、それは掛け価のない一、二秒の間のできごとである。思わず「おや」と目を見はつた時には、少女はもういつの間にか窓の中へ姿を隠したのであろう。窓はどの窓も同じように人気のない窓かけを垂らしている。……

「さあ、もう映しかたはわかつたらう？」

父の言葉はぼうぜんとした彼を現実の世界へ呼びもどした。父は葉巻をくわえたまま、退屈そうに後ろにたたずんでいる。玩具屋の外の往来もあいかわらず人通りを絶たないらしい。主人も——きれいに髪を分けた主人は小手調べをすませた手品師のように、妙に蒼白い頬のあたりへ満足の微笑をただよわせている。保吉は急にこの幻灯を一刻も早く彼の部屋へ持って帰りたいと思いだした。……

保吉はその晩父といっしょに蠟ろうを引いた布の上へ、もう一度ヴェネチアの風景を映した。中空の三日月、両側の家々、家々の窓の薔薇の花を映したひとすじの水路の水の光、——それは皆前に見たとおりである。が、あの愛くるしい少女だけはどうしたのか今度は顔を出さない。窓という窓はいつまで待っても、だらりと下がった窓かけの後ろに家々の秘密を封じている。保吉はどうとう待ち遠しさにたえかね、ランプの具合などを気にしていた父へ注歎願たんがんするように話しかけた。

「あの女の子はどうして出ないの？」

「女の子？ どこかに女の子がいるのかい？」

父は保吉の問いの意味さえ、はつきりわからない様子である。

「ううん、いはしなくても、顔だけ窓から出したじゃないの？」

「ううん？」

「玩具屋の壁へ映した時に。」

「あの時も女の子なんぞは出やしないさ。」

「だって顔を出したのが見えたんだもの。」

「何を言っている？」

父はなんと思ったか保吉の額へ手のひらをやった。それから急に保吉にもつけ景気(注5)とわかる大声を出した。

② 「さあ、今度は何を映そう？」

けれども保吉は耳にもかけず、ヴェネチアの風景をながめつづけた。窓は薄明るい水路の水に静かな窓かけを映している。しかしつかはどこの窓から、大きいリボンをした少女が一人、突然顔を出さぬものでもない。——彼はこう考えると、名状(注6)のできぬなつかしさを感じた。同時に従来知らなかった、あるうれしい悲しさをも感じた。あの画の幻灯の中にちらりと顔を出した少女は、じつさい何か超自然の霊が彼の目に姿を現あわしたのであるか？ あるいはまた少年に起こりやすい幻覚の一種にすぎなかったのだろうか？ それはもちろん彼自身にも解決できないのにちがいない。

あくたがわりゅうのすけ
(芥川龍之介「少年」による。)

(注1) ベニス＝ヴェネチア。イタリア北東部に位置する都市。「水の都」の別名をもつ。

(注2) ダンヌンチオ＝イタリアの詩人、小説家、劇作家。

(注3) 丹塗り＝赤または朱色に塗ってあること。また、塗ってあるもの。

(注4) 歎願＝事情を述べて熱心に願うこと。

(注5) つけ景気＝実際はそうではないのに景気がよいように見せかけること。

(注6) 名状のできぬ＝言葉で言い表すことができない。

— 線部① 「それは掛け値のない一、二秒の間のできごとである」とありますが、「掛け値」はこの場合、物事を大げさに言うことを意味します。この部分についての説明として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 少女の映っていた時間が、ほんのわずかな間のできごとであったということ。
- 2 少女の映っていた時間が、ずいぶんと長い間のできごとであったということ。
- 3 ヴェネチアの風景の映っていた時間が、ほんのわずかな間のできごとであったということ。
- 4 ヴェネチアの風景の映っていた時間が、ずいぶんと長い間のできごとであったということ。

— 線部② 「『さあ、今度は何を映そう？』けれども保吉は耳にもかけず、ヴェネチアの風景をながめつづけた。」とありますが、この場面についての説明として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 父は保吉に幻灯を映すように促したが、保吉はヴェネチアの静かな風景がとても気に入ったので父の発言に答えずにいる。
- 2 父はヴェネチアの風景の映り具合を気にしたが、保吉は自分が愛する浅草や銀座の風景の映り具合を気にしている。
- 3 父は他の画を映し出すことを提案したが、保吉は少女がもう一度幻灯の画に現れるのではないかと考えている。
- 4 父は少女が映っている画が他にもないか探そうとしたが、保吉は少女が再び現れることはないかと諦めている。